

紹介

佐藤信一著・和歌文学会監修

【菅原道真】（コレクシヨン日本歌人選043）

木 下 綾 子

本書は、菅原道真（八四五―九〇三）について緻密な研究を積み重ねてきた、佐藤信一氏による待望の入門書である。近年、日本文学研究において漢詩文が再評価されているが、この「コレクシヨン日本歌人選」に道真が選ばれ、佐藤氏という著者を得たことは大いなる喜びである。構成は以下のとおり。

【和歌】 ※二十六首

【漢詩】 ※八首

歌人略伝

略年譜

解説「歌人であり政治家でもあった詩人 菅原道真」

読書案内

【付録エッセイ】大岡信氏「古代モダニズムの内と外」（抄）
各作品には、本文、出典、語釈、口語訳が示され、脚注付きの観賞が見開き二頁、あるいは四頁でまとめられている。

本書の第一の特徴は、和歌が積極的に評価されている点である。そもそも、道真作とされる和歌には天神信仰による後人の

仮託が含まれ、これまで総合的な注釈は登場しなかった。対して、本書では、典拠や用例を丹念に検討することによって、これらの和歌が、彼の漢詩と同じく中国の史書や経書、詩に依拠することを確認した。そして、のちの『古今和歌集』に見える漢詩的な表現を牽引したと論じる。まさに、「詩と歌とを二つながら往還した道真の達成」（六九頁）を読み取っており、大変意義深い。道真の小宇宙ともいべき言語世界や、和漢の垣根をやすやすと越える自由な知性、およびその深化が窺え、魅力的であった。

第二の特徴は、読者にとって最も興味深いテーマである、大宰府左遷の悲劇を軸にして作品が構成されている点である。漢詩については、道真の人生をたどるとともに、事件の兆候や経緯、背景を丁寧に説明している。また、和歌については、左遷の命を受けたのち、京から大宰府にいたる道のりや彼の地における生活、そして死に臨んでと、刻々と揺れ動く心情をいきいきと描き出しており、まるで一編の物語を読むかのようなものである。最後に著者は、道真にとって創作とは「自分の声を聴いてくれる真の知音を求めたためのもの」（一七頁）であり、その根底には孤独と渴望があると指摘する。ならば、本書はその望みに応えたといえまいか。道真の作品・人物研究は、本書によって広く門戸を開かれた。著者や読者諸氏と、お互いの意見や感想を述べ合いたくなる一冊である。

（二〇二二年一〇月三十一日刊 四六判 一二八頁 本体一二〇〇円 笠間書院 コレクシヨン日本歌人選）

（本学非常勤講師）